

歌舞伎における今様と能・狂言——明和期を中心に——

近 藤 美 織

はじめに

能や狂言を取り入れた歌舞伎舞踊に松羽目物があることは周知の通りである。歌舞伎には松羽目物以前にも能・狂言を取り入れた舞踊が様々にあった。宝暦頃になると、資料の中に「今様」や「今様の役人」といった今様という言葉を含む表記が目につくようになる。この今様の中にも能や狂言が取り入れられている。

たとえば渥美清太郎氏はその著書『日本舞踊史』（雄山閣・一九五八年七月）の中で、曾我狂言と顔見世狂言に見られる今様の所作事について次のように記している。

一番目の大詰は、対面にきまつておりましたが、その幕開きには、かならず踊りを付けなければいけなかったのです。只今の対面にはこれが欠けておりますが、江戸時代には必須条件でした。大体、対面では、源頼家が祐経の館へ呼ばれてくる。その饗広（筆者注…饗応か）のために、今様の踊を見せる。その踊り子として、朝比奈や虎少将が手引きをして、曾我兄弟が入り込む。踊りがすんだのち、対面になるとこの型だった（後略）

（『曾我狂言の舞踊劇』渥美清太郎著『日本舞踊史』雄山閣・一九五八年七月）

顔見世の三建目、是は序幕のことですが、午前六時頃に幕があきました。（中略）毎年、各座とも、新作の狂言でありながら、舞台面は、或る神社の廻廊、今でいえば「車引」の道具から玉垣を、取ってしまったような場面でなければいけなかったのです。（中略）幕があくと、その廻廊の前に、小さな敵役が突立っている、それを仕丁たちがとり巻いている、というような舞台面が、お定まりでございまして、これから立廻りがあつて、一同引ッ込みますと、うしろのほうで「今様はじまり」と大きな声でとなります。今様とは、神前に奉仕する舞踊という意味であります。そこで横から山台が突き出され、そこに長唄の連中が乗つていて、これから踊りが始まる（後略）

（渥美清太郎「顔見世狂言の舞踊劇」前掲）

また、古井戸秀夫氏は次のように記している。

座元や座頭、立女形といった有力者の御曹司たちが、劇中劇で勅使の饗応のために今様の所作事を奉納する場面があった。そこでは「高砂」や「汐汲」といった能を歌舞伎化したものが演ぜられるのがつねであった。本曲は、そのような三立目の今様の所作事の一つとして初演されたものと推定されている。

（『雛鶴三番叟』鑑賞／古井戸秀夫『舞踊手帖』駸々堂出版・一九九〇年十一月）

そして、「陸花艳」（内題「艳狩」）（『御撰勸進帳』安永二年十一月中村座）、「若緑姿相生」（『清和源氏二代将』文化二年十一月中村座）、「彩色松汐汲」（『蝶花形恋智源氏』文化二年十一月河原崎座）を能に取材した今様の所作事として、翻刻を紹介している。一方、板谷徹氏は「江戸の身ぶり——所作事としての娘道成寺」（『日本の近世十一 伝統芸能の展開』中央公論社・一九九三年三月）で「狂言の趣向を離れて、内容的には、狂言と関係の薄い所作事を狂言の筋のなかに組み込む方法として、今様の所作事はきわめて便利に使われ」として、長唄「百千鳥娘道成寺」（宝暦六年十一月市村座「復花金玉桜」）を例に挙げている。そして、宝暦から安永にかけての興行のうち、曾我狂言と曾我狂言以外の演目に見られる今様を例に挙げている。それは次の通りである。

- ① せりふ「祐経／箱王 今様熊坂の段かけ合せりふ」（宝暦三年（一七五三）正月 中村座「男伊達初買曾我」）
- ② 「今様に三番叟の段」（『役者懐相性』宝暦四年一月刊）（宝暦三年（一七五三）十一月森田座「将門故郷錦」）
- ③ 半太夫「雪傘双牡丹」（宝暦五年（一七五五）正月市村座「權愛護曾我」）
- ④ 掛合（一中・半太夫）「浦衝若葉花」（宝暦五年（一七五五）正月市村座「權愛護曾我」）
- ⑤ 「曾我兄弟、今様仕とら、少将のやつし」（『役者伊勢参』宝暦五年三月刊）（宝

曆五年（一七五五）正月森田座「其血規矩明曾我」

⑥「若衆丹前の所作」〔役者段階子〕宝曆十年一月刊（宝曆九年（一七五九）十一月中村座「葦市顔見世祭」（筆者注：葦市顔鏡祭か））

⑦「今様道成寺」〔役者花鼎〕明和六年三月刊（明和六年（一七六九）二月市村座「江戸花陽向曾我」）

⑧長唄「釣狐春乱菊」（鏡池 俤 曾我）明和七年（一七七〇）正月中村座

⑨富本「夕霧阿波鳴渡」（明和八年（一七七二）正月森田座「回方曾我幾年曆」）

⑩長唄「相生初若菜」（明和八年（一七七二）二月市村座「和田酒宴納三組」）

⑪長唄「月都誓塩竈」（安永元年（一七七二）正月中村座「江戸容儀曳綱坂」）

⑫長唄「初霜信田笠」（安永元年（一七七二）正月市村座「江戸容儀曳綱坂」）

⑬長唄「初恋姫小松」（安永二年（一七七三）正月森田座「色時絵曾我羽觴」）

⑭富本「梅柳二人傳」（安永二年（一七七三）正月森田座「色時絵曾我羽觴」）

二

このうち、長唄が⑧⑩⑪⑫⑬の五例、富本が⑨⑭の二例、半太夫が③の一例、掛合セリフが①の一例、掛合が④の一例、役者評判記に記述が見られるものが②⑤⑥⑦の四例であった。

板谷氏のご報告を補うかたちで、「今様」の用例を調査した。時期は板谷氏が今様の場が多く見られると指摘している明和・安永期のうち、まず明和期の顔見世狂言と曾我狂言から事例を取り上げて報告したい。

一、明和元年十一月中村座「吾妻花相馬内裡」（役）
大名題の語りに「一条戻り橋におゐて今様興行候」と記される。

二、明和元年十一月中村座「若木花須磨初雪」（役）
今様の一つの奴あも平 二役奥野国五郎

同 もちない 市川鶴治
同 いも平 はん坂（筆者注：紋付では坂東）うね治
同 あん蔵 中村富五郎

同 あめ平 吾妻君蔵
同 あど内 吾妻仙之丞
同 米蔵 尾上かね松

三、明和元年十一月森田座「傾情千丈嵩」（役）
大名題の語りに「今様の釣野狐」と記されている。

四、明和二年十一月市村座「降積花二代源氏」（役）
今様奴あらいつば平 坂田国八

同 ちよこざいごく蔵 二役沢村龍蔵
同 きよとい左平次 二役中村虎次

同 どたまわや介 坂東重蔵

五、明和三年十一月中村座「金花凱陣荒武者」（役）（評）
〔役割番付〕

今様役人ちやば大じん 瀬川吉松
同 奴ちよこ介 沢村鶴蔵

今様奴そで介 姉川新四郎

〔役者評判記〕「役者巡炭」（明和四年一月刊）
芳沢崎之助「此度は和田左衛門が妻なれど、貞任が妹故に去れ今様のけいせい姿と成源家へ入込」

六、明和四年正月 森田座「皆癒百合若大臣」（役）
今様の奴屋田平 坂東勘蔵

七、明和四年十一月中村座「太平記賤女振袖」（評）
〔役者党紫選〕（明和五年一月刊）

瀬川菊之丞「此度は栗生が妹いつき、今様の役人にて、なり平あづま下りのせり出し、とんできれい、彦三幸四駒蔵助五郎四人を仕丁にして、供につれしはきつい御馳走」
坂東彦三郎「薪水文は小山田太郎にて、今様の仕丁姿、栗生が妹いつきに惚られ、久しぶりにて路考との色事は、あやかり者の様なれ共、外の三人へ計落がきて、きついでれ坊」

八、明和四年十一月森田座「真田与市 磐 土産」(役)
小名題に「今様成」と記されている。

九、明和六年正月 中村座「曾我 襖 愛護若松」(辻) (役) (評)
(辻番付)

今様役人あげまきの介六 雷蔵

同 傾城あげまき 吉松

同 若い者門兵衛 平蔵

同 若い者せん兵衛 三木蔵

(役割番付)

今様役人奴よね平 中村介次

同 あわ平 奥野国五郎

同 けし平 市川三木蔵

同 あづ平 市川辰蔵

今様役人あげまきの介六 市川雷蔵

同 傾城あげまき 瀬川吉松

同 若い者もんべえ 市川平蔵

同 若い者せんべえ 市川三木蔵

(役者評判記)『役者松太夫』(明和六年五月刊)

市川雷蔵「古人雷蔵(中略)今年三回忌に相当りましてござれば追善として 此度五月五日より 高麗蔵引合にて 江戸桜其佛に今様助六の出端 古栢車の佛まのあたり に思ひ出し諸見物一同に袖を絞りまする」

十、明和六年二月 市村座「江戸花陽向曾我」(役) (絵) (評)

(役割番付)

① 今様の役人花形主馬之介実は本名主馬判官盛久 市村羽左衛門

(絵本) (芝居を元にした絵本「新版 二人新兵衛／二人おまん 稱曾我物語」)

② 宝船七福神遊び 今様役人 化粧坂の少将 (二丁裏)

③ 工藤祐経が館へ頼朝公入らせ給へば 御馳走のため今様道成寺を催しける 祐経

脇役を相勤める (三丁裏)

④ 今様役人三位 実は千寿の前 大当り／＼ (三丁裏)

⑤ 主馬判官盛久 シテの役人 盛久頼朝を狙い 今様役人道成寺のシテになり蛇体となり頼朝の御座をめがけ飛びかゝるを祐経押し隔て かやうと悟りしゆへ我憎

役を務めしとて 頼朝公の御烏帽子を頭となぞらえ 盛久に□□かへす (四丁表)

⑥ 今様役人 中将実は大磯の虎 (四丁表)

(役者評判記)『役者花鼎』(明和六年三月刊)

⑦ 吾妻藤蔵「此度今様道成寺役人三位にて 太夫元相手にて所作事 出来ました
(一丁裏)」

⑧ 佐野川市松「二役大磯の虎なれど 今様の役人中将と成 上るりの場見へよし」

⑨ 市村羽左衛門「次に今様の役人花形主馬之介にて女形の出立 則文字上るりにて所作は申に及すよし」

十一、明和七年正月 中村座「鏡池佛曾我」(絵)

芝居絵本は演劇博物館所蔵(以下演博本)と高橋則子氏紹介の小池正胤氏所蔵(以下小池本)の二種が確認できる。演博本は一丁表・裏が欠けているが、その他は小池本と同じである。三カ所確認できた。

① 団三郎 中村介五郎 工藤を恨みし故 宇佐見三郎その他家来に打擲されしに 宇佐見が懐中したる合様の切手札を拾いて喜び 曾我兄弟に渡し 今様の役

人に仕立 祐経に对面させんと裏道を切ぬける (二丁裏(小池本では三丁裏))

② 工藤左衛門 中村仲蔵 頼家の御前にて今様の役目を受け給り 釣狐の所作事 白蔵主の役目を勤める (五丁裏(六丁裏))

③ 曾我兄弟は敵工藤を討たんと心を尽くし 団三郎が手に入し今様の切手にてやす／＼と入込 祐経の傍近く寄りて 狐釣りの役人となり 釣罟へ短刀を仕込み 折よくば討たんと窺う (五丁裏(六丁裏))

(役者評判記)

④ 瀬川菊之丞「妙なるかな今様の美人」(『役者美開帳』明和七年三月刊)

⑤ 中村助五郎「此度団三郎にて 兄鬼王の供して出 工藤に逢 曾我を悪口せらるゝ故に無念がり 其上鏡にて面てへ疵を付られ 又大勢にて打擲に合 鬼王に仮に勘当受け 今様の切手を取て 兄弟へ送らんとする迄 此度はいかふ出来ました」

(『役者美開帳』)

⑥ 中村助五郎「大勢の者にぶたれ 鬼王に勘当受て今様の切手を取り 兄弟へ送らんとする迄 評よく大慶」(『役者色艶起』明和七年六月刊)

十二、明和八年二月 市村座「和田酒宴納三組」(正) (評)

(長唄正本) 第一番目三立目「相生初若菜」の冒頭

へさつさの声穏やかに松の風 その源の流れも清く治まる御代の今様や
(役者評判記)『役者いろ／＼有』(明和八年三月刊)

小佐川常世「橋くようの今様に、染五郎 秀十郎の三人のおし出し」

十三、明和八年正月 森田座「回方曾我幾年曆」(絵) (評)

《芝居絵本》

① 舞鶴屋伝三 宗盛をいさめの今様役人さいわいに 祐経をころしくれよと別□がいひつけをきいて 鬼王伝三を殺し 祐経が難儀を救わんと切かける(六丁表)

② 箱根にて宗盛公饗応のため今様狂言に夕霧阿波鳴門 上るり太夫 富本家満登太夫 傾城夕霧 中村野塩 藤屋伊左衛門 中村富十郎 大当(六丁表)

《役者評判記》『役者いろ／＼有』(明和八年三月刊)

③ 中村富十郎「二役団三郎にて今様の狂言に、藤屋伊左衛門 大和大夫の浄るりにての所作」

④ 中村野塩「此度宗盛の息女 玉虫姫にて、今様の役人と成 夕霧の所作よし」

⑤ 坂田半五郎「半五郎は此度鬼王新左衛門にて、(中略)大磯屋の伝三を殺し 今様の役人と成 花道にて死骸に向ひ詫び(ママ)をして入らる、所は、中の十町よふござります。次に夕霧の今様に、吉田屋喜左衛門も大てい 慶子と兩人工藤に 対面の場合は祐成時宗の思入 大きくてよいぞ」

十四、明和八年十一月中村座「倭花小野五文字」(役) (正)

《役割番付》

今様の深草焼唐子孫南子 市川辰蔵

同 唐子躰北子 市川亀吉

同 深草焼の角力関取小釈迦嶽 市川三木蔵

同 関取小仁王堂 松本豊蔵

《長唄正本》第一番目三立目「花角力里盃」

表紙に次のような記載がある。

今様の深草焼唐子孫南子 市川辰蔵

同 唐子躰北子 市川亀吉

同 深草焼の角力関取小釈迦嶽 市川三木蔵

同 関取小仁王堂 松本豊蔵

また、詞章末尾に「通ひ廊の深編笠に 粋も不粋も有頂てんとん 花を飾りし今日の今様」とある。

以上が明和期の顔見世狂言と曾我狂言に見られる今様の用例である。「今様」本来の意味である当世風・今風という意味を持つと考えられるのは十一の④のみであった。

また、白拍子の舞という意味³を持つと思われる用例は確認できなかった。他の用例には劇中劇という意味があったと考えられる。そのうち、一六八は用例に挙げた記述以上の資料を見付けられなかったため、七・九・十四(十一の④を除く)を見ていく。

三

七、明和四年十一月中村座「太平記賤女振袖」

瀬川菊之丞の評に「彦三 幸四 駒蔵 助五郎 四人を仕丁にして、供につれ」たとある。また、彦三こと坂東彦三郎の評に「外の三人へ計落がき」たとある。この三人が「幸四 駒蔵 助五郎」の事であると思われる。菊之丞と彦三郎の他、幸四こと松本幸四郎、駒蔵こと市川高麗蔵、助五郎こと中村助五郎のそれぞれ役名を役割番付で補いながら見てみたい。

① 瀬川菊之丞 栗生左衛門妹いつき

「此度は栗生が妹いつき、今様の役人にて、なり平あづま下りのせり出し、とんできれい、彦三幸四駒蔵助五郎四人を仕丁にして、供につれしはきつい御馳走」

② 坂東彦三郎 小山田太郎高家

「薪水丈は小山田太郎にて、今様の仕丁姿、栗生が妹いつきに惚られ、久しぶりにて路考との色事は、あやかり者の様なれ共、外の三人へ計落がきて、きつてて坊」

③ 松本幸四郎 相模次郎時行

「此度は相模次郎時行にて仕丁の姿、齋が恋を取持、義兵衛を義貞と聞、討もらせしとくやまる、所よし」

④ 市川高麗蔵 仁田左中将義貞

「此度は仁田義貞 仕丁の姿に成、栗生が妹いつきが四人の内に思ふ男有と云しを、うぬ惚れのおかしみできました」

⑤ 中村助五郎 淵部伊賀守友房

「此度は淵部伊賀守 せり出しの仕丁姿よし」

幸四郎・高麗蔵・助五郎の評にある「仕丁」というのは彦三郎の「今様の仕丁」と同じで今様の役としての仕丁であったと考えられる。また、幸四郎の評に「義兵衛を義貞と聞」とある。義貞が今様の仕丁の姿となる際に義兵衛と名前が付いていたのであろう。おそらくは他の三人にも仕丁としての名前が付いていたのではないだろうか。以上のことから想像される場面は次の通りである。

栗生妹いつきは今様の役人となり、同じく今様の仕丁となった小山田太郎(坂東彦三郎)、相模次郎(松本幸四郎)、仁田義貞(市川高麗蔵)、淵部伊賀守(中村助五郎)らと共にせり上がり業平の東下りを踊る。このうち、相模次郎はいつきと小山田の恋

の取持をし、義兵衛こと仁田義貞はいつきが自分に惚れていると勘違いをした。

九、明和六年正月 中村座「曾我俄愛護若松」長唄「江戸桜其佛」(三番目)

辻番付と役割番付の役人替名のうち、今様役人の雷蔵、吉松、平蔵、三木蔵は三番目所演の長唄「江戸桜其佛」の配役と一致する。この所作事は「役者松太夫」によれば、初代雷蔵の三回忌追善の所作事で、市川高麗蔵の取り持ちで五月五日から上演された。

雷蔵の評に「江戸桜其佛に今様助六の出端」を見せたとある。高麗蔵の評によると「三番めは座付ばかり 雷蔵が花道にてあくたいをつく時 上下にはち巻して棒を持 しろざけ売のやつし受取ました 夫れより雷蔵引合せの口上」とある。高麗蔵は「座付」の口上だけで役には扮さず、雷蔵が花道で助六の悪態をつくときに、上下の口上姿でありながらはちまき、棒を持ち白酒売りのやつしを見せたようである。詞章は「助六由縁江戸桜」の並び傾城の出に唄われる、「春霞立てるやいづこ三吉野の」と始まる。そして「卯の花月に散りし身の その佛の縁とて」以下、詞章の中に追善の言葉織り交ぜている。これは板谷氏のいう「百千鳥娘道成寺」と同様に、芝居の筋とは関係のない追善の所作事を取り入れるために設定された今様と思われる。

十 明和六年二月 市村座「江戸花陽向曾我」(役) (絵) (評)

役割番付・絵本・評判記の今様の用例を見ると今様の場が②/①・③④⑤の二つに分けられる。そこで、前者をイ、後者をロとわけて考察した。芝居を元にした絵本は狂言絵本と比べ信頼性に欠けるところがあるが、役割番付や役者評判記など他の資料と合わせながら検討してみたい。

イ 宝船七福神遊び ②

絵本の二丁裏と三丁表に見開きで七福神が描かれており、二丁裏には「宝船七福神遊び 今様役人 化粧坂の少将」と書かれている。絵本には役名と紋が記されているが、役割番付を見ると化粧坂の少将は山下京之助が演じていることがわかる。宝船七福神遊びには弁財天の他に、六人描かれている。それぞれ役者名を役割番付で補い、次にまとめた。

①山下京之助 化粧坂の少将 弁財天

役者評判記『役者花鼎』の山下京之助評には「次に少将にて七福神弁財天の役 大てい」とある。この少将が化粧坂の少将のことである。また、宝船七福神の化粧坂の少将は弁財天の持ち物である琵琶を持った姿で描かれている。ここから、山下京之助が演じる化粧坂の少将が宝船七福神遊びにおいて今様の役人として弁財天に扮したことがわかる。

②沢村宗十郎 工藤祐経 寿老人

役者評判記には次のように書かれている。

擬対面の場七騎落を祝し七福神の出立 宝舟の押出し花やかでござる。夫れより河津を討たる事を包まず明し 寿老人の役目なれば、一卷に杖を持そへ 是は赤沢山にて近江八幡が小だてに取し椎の木の花也。是を以て祐成を討、則一卷を兄弟へ遣はし開き見れば信田狩場の絵図也

この「寿老人の役目」というのが山下京之助の「今様の役人」と同じ意味なのだろう。宝船七福神遊びでは寿老人の持ち物である杖を持った姿で描かれている。この杖が、曾我兄弟の父河津三郎祐泰が討たれた際に用いられた椎の木となつてゐる。また、絵本の宝船七福神遊びの場に「工藤祐経曾我兄弟に対面」と書かれており、対面の場であつたことがわかる。

③市川団蔵 曾我五郎時宗 大黒天

役者評判記には次のように書かれている。

扱此度陽向曾我の五郎 対面の出端 七福神大黒の役人 まことに五郎の親玉 又格別な物でござる。是は桜田治介(ママ)の思ひ付にて、対面を大きく致されて、見へよく珍重く

「大黒の役人」というのが「今様の役人」のことなのであろう。宝船七福神遊びでも大黒天の持ち物である小槌を三宝にのせた姿で描かれている。

④市村羽左衛門 曾我十郎祐成 恵比寿

絵本では恵比寿神の持ち物である烏帽子と釣り竿を三宝にのせた姿で描かれている。役者評判記にはこの場についての記述が見られないが、宝船七福神遊びに「曾我兄弟 恵比寿大黒の役にて祐経に対面する」と書かれており、五郎が大黒の役であることから、これも恵比寿神の役であつたと考えられる。また、「祐経に対面」とあり、ここから宝船七福神遊びの場が対面の場であつたことがわかる。

⑤中島三甫右衛門 梶原源太景季 毘沙門

役者評判記では次のように書かれている。

此度梶原源太にて、(中略)次に七福神の役目 毘沙門

「七福神の役目 毘沙門」と書かれており、これも「今様の役人」と同じ意味だろう。絵本には毘沙門天の持ち物である鉾と兜を持った姿で描かれている。

⑥坂東三八 朝比奈三郎義秀 布袋

役者評判記には次のように書かれている。

二役得手物の朝比奈にて、(中略)夫より布袋の役にて兄弟を手引きして工藤に会はせ

この「布袋の役」というのも「今様の役人」と同じ意味なのであろう。絵本には布

袋和尚の特徴である大きなお腹を出した姿で描かれている。

⑦富沢半三郎（役割番付では半三）の和田小太郎義盛

役者評判記には「此度和田小太郎義盛にて、福祿寿の役」と書かれている。これも「今様の役人」と同義であろう。宝船七福神の場には福祿寿の特徴である顎髭をつけた和田小太郎義盛が描かれている。

つまり七福神遊びは、この芝居における役のまま、七福神の役に扮して行った物であることがわかる。

それでは、この七福神の遊びはどういったものであったのだろうか。

役者評判記には、この七福神の遊びは「七騎落のお祝い」に行われたとある。「七騎落」とは治承四年（一一八〇）八月の石橋山の合戦で敗れ、落ち延びた頼朝が海上で和田義盛と再会したことをいう。

この七福神の遊びは絵本や役者評判記に所作事であったことを示すような記述がない。また、該当すると思われる薄物正本もないため、この場面が所作事であったのかどうかはわからない。以上から想像される七福神遊びの場は次の通りである。

宝船に乗った工藤祐経（沢村宗十郎）が押出しで登場する。絵本では宝船の中に七福神の小道具を手にした祐経、化粧坂の少将（山下京之介）、梶原源太（中島三甫右衛門）、小林朝比奈（坂東三八）、和田義盛（富沢半三郎）が描かれ、船の前に七福神の小道具を手にした曾我兄弟（市川団藏・市村羽左衛門）が描かれている。朝比奈は曾我兄弟の手引きをし、祐経と対面させる。祐経は河津三郎祐泰を討ったことをあかし、椎の木の杖で祐成を打ち、兄弟に信田狩場の絵図を与える。

ロ 今様道成寺①・③・⑨

役割番付の浄瑠璃名題には常磐津「其霞撞鐘頭」と書かれており、そこに記された役者名から「今様道成寺」の道行部分に常磐津が演奏されたことが窺える。また、ここに「五立目二相勤申候」とあることから、「今様道成寺」が五立目に位置していたことがわかる。

絵本に描かれた主馬判官盛久（市村羽左衛門）は長髪に鬘帯を締めており、娘道成寺よりも能「道成寺」のシテを思わせる。羽左衛門の評には「乱拍子の段見ん物事」という記述も見られる。工藤祐経（沢村宗十郎）の僧も角帽子を被り、中啓を持って能の脇僧を思わせる姿である。また、千手の前（吾妻藤蔵）や大磯の虎（佐野川市松）は角帽子に袖無し羽織、中啓を手に持ち、能に出てくる能力を思わせる扮装である。正本が残っており、詳細は不明であるが、歌舞伎の「娘道成寺」よりも能「道成寺」に近い内容であった可能性が考えられるかも知れない。

役割番付や役者評判記、絵本から想定される道成寺の場は次の通りである。

工藤祐経は源頼朝（沢村権十郎）が来館したため、もてなしのために今様道成寺を上演する。祐経は脇役の僧を務め、もと平家の武将で頼朝を狙う主馬判官盛久は花形主馬之介となり、今様の役人としてシテを務める。千寿の前（吾妻藤蔵）が今様の役人三位を、大磯の虎（佐野川市松）が今様の役人中将を務める。祐経による鐘の語りの後、鐘から蛇体となって出てきた盛久は踊りに乗じて、頼朝を狙うが祐経に止められる。祐経は盛久が頼朝を狙っていることを察し、僧役を務めたことを明らかにする。盛久は頼朝の烏帽子を得る。

十一、明和七年正月中村座の「鏡池佛曾我」長唄「釣狐春乱菊」

板谷氏が芝居絵本の記載を一部を紹介しているほか、高橋則子氏が関係資料の翻字、紹介などを行っている。それらをふまえた上で、改めて考えてみたい。

芝居絵本にはそれぞれ「今様の切手札」「今様の切手」のほか、「今様の役人」「今様の役目」「白蔵主の役目」「狐釣りの役人」といった記載がある。「白蔵主の役目」「狐釣りの役人」というのは「今様の役目」「今様の役人」と同じ意味であると思われる。なお、用例①の「合様の切手札」は高橋氏が既に指摘しているが「今様の切手札」の誤りと思われる。

役者評判記にも「今様の切手」という記載が確認できる。また、市川八百蔵評の「此度奴軍助にて（中略）次に時宗にて釣り狐の役人と成て入込 祐経に対面の場よし」（『役者美開帳』）や、「次に時宗にて釣り狐の役人と成て入込 対面の所よし」（『役者色艶起』）に見られる「釣り狐の役人」は芝居絵本同様、「今様の役人」と同義と考えられる。

さらに、市川高麗蔵の評には「此度曾我十郎 釣狐対面 せり出しきれい」（『役者美開帳』）、「曾我の十郎にて釣狐対面 せり出しきれい」（『役者色艶起』）という様に「釣狐対面」という言葉がある。これと同様に役割番付の小名題に「対面釣狐」と書かれており、これらの記述から今様場が対面の場であり、その今様の所作事として「釣り狐の所作事」が踊られたことがわかる。この所作事が長唄「釣狐春乱菊」である。

ここまでの所から芝居の筋を確認してみたい。

工藤左衛門祐経（中村仲蔵）は源頼家（中村歌次）の前で今様の役目を受けて釣り狐の所作事、白蔵主の役目を務めることになる。鬼王団三郎（中村助五郎）は兄鬼王新左衛門（坂田藤十郎）の供をして出かける中、工藤祐経に会う。祐経が曾我の悪口を言うため、団三郎は無念に思う。団三郎は兄鬼王新左衛門から勘当を受け、工藤館へ下部となって入り込む。そこで宇佐見二郎（市川伊達蔵）とその家来に打擲されるが、

宇佐見が落とした今様の切手を手に入れる。曾我十郎・五郎兄弟（市川高麗蔵・市川八百蔵）は団三郎が手に入れた今様の切手によって工藤の館へ容易に入り込み、狐釣りの罠に短刀を仕込み、祐経に近づいたために狐釣りの役人となる。そして、所作事「釣狐春乱菊」となり、朝比奈（中村伝九郎）の引き合せて祐経と曾我兄弟は対面する。

長唄「釣狐春乱菊」が狂言「釣狐」を題材としていることは、芝居絵本と長唄正本、役者評判記の挿絵に描かれた、狐の面を持った工藤祐経や鼠を餌にした罠を持った曾我十郎と曾我五郎の姿からもわかる。それでは「釣狐春乱菊」の詞章からはどうであろうか。詞章の冒頭には狂言「釣狐」の次第「我は化けたと思へども」が引用されている。直接の引用はこの冒頭だけのようであるが、「姿は伯父の白蔵主」「罠に鼠をとろくく」や、「切るに切られず抜けられぬ」から想像される狐が罠にかかった後、「我が住む森へ帰らん」と森に帰っていく末尾などから、構成が狂言「釣狐」から取られていることがわかる。

また、役者評判記のうち『役者美開帳』と『役者色艶起』の双方に市川高麗蔵の曾我十郎に対して「釣狐対面にせり出しきれい」と記されている。ここから曾我兄弟が舞台にせり出して登場したことがわかる。また、『劇神僊筆記』に「釣狐ノ工藤ノ唾へ面落テ 鳥ハ八声ニト唄ニカ、ル所」と記されている。冒頭の「我は化けたと思へども」只あさましきこの身なり」のあと、祐経がかけていた狐の面を落として顔を見せると歌舞伎風の三下りになり、「鳥は八声を告げ渡る」となったことがわかる。また、「釣狐」における狩人と伯父白蔵主に化けた狐の狩る者と狩られる者という関係が、工藤祐経と祐経を敵と狙う曾我兄弟の関係になぞらえてあることがわかる。「釣狐春乱菊」は、芝居の筋と関係しつつ狂言を取り込んだ所作事だといえよう。

十二、明和八年二月 市村座「和田酒宴納三組」長唄「相生初若菜」（一番目三立目）

小佐川常世の評に「染五郎 秀十郎」と記されているが、小佐川常世（月小夜妹十六夜）・市川染五郎（伊豆の次郎祐兼）・初代松本秀十郎（風間八郎光好）は一番目三立目の長唄「相生初若菜」を踊っていることが正本の表紙からわかる。「若菜摘むなる手もたゆく」と月小夜妹十六夜（小佐川常世）が女仕丁の姿で正月行事の若菜摘みを見せた。また、「引くや昔のそのためし 今に絶えぬ寿を 爰に目出度小松引」と風間八郎（松本秀十郎）と伊賀の次郎（市川染五郎）の仕丁二人がやはり正月行事の小松引きを所作にして見せたと思われる。

十三、明和八年正月 森田座「回方曾我幾年曆」富本「夕霧阿波鳴渡」（一番目四立目）
役割番付の浄瑠璃名題から今様が「夕霧阿波鳴渡」であったことがわかる。また、工藤祐経と鬼王兄弟の対面は祐経と曾我兄弟の対面を見立てたものであるといえよう。

芝居絵本と役者評判記、役割番付から想像できる場面は次の通りである。

曾我兄弟の家来、鬼王新左衛門（坂田半五郎）は舞鶴（役者評判記では大磯）屋伝三（富沢江戸蔵）が工藤祐経の館で行われる今様の役人であることを知り殺害する。この今様の所作事は平宗盛（中村四郎五郎）をもてなすものであった。宗盛饗応のための富本「夕霧阿波鳴門」で鬼王は吉田屋喜左衛門役、宗盛息女玉虫姫（中村野塩）は傾城夕霧の役、同じく鬼王の弟団三郎（中村富十郎）は藤屋伊左衛門の役となつて所作事を踊った。その後、鬼王と団三郎は祐経と対面する。

十四、明和八年十一月中村座「倭花小野五文字」長唄「花角力里盃」（一番目三立目）

長唄正本の表紙によると前述の四人の他に早良親王太子三花女公（中村七三郎）と行平一子行若丸（市川純蔵）の二人の計六人が出ていたことがわかる。いずれも子役であった。唐子姿の辰蔵・亀吉は団扇を手にし、閑取姿の三木蔵と豊蔵は刀を手をしている。おそらくは「狂ひ遊ばば雪散つて 出づるや角力の寄せ太鼓」以下角力の手が續く箇所、行司と角力の手を所作で見せたと思われる。また、「いつそ初手から勤めが優しぢや 嫌な禿の憂き勤め」以下で七三郎と純蔵が廓のやりとりを見せたと思われる。また、山下次郎三が深草のかわかけ師丸太夫を演じたことが役割番付と役割評判記からわかる。辰蔵・亀吉・三木蔵・豊蔵のいずれも役名に今様の深草焼とあることから、次郎三の丸太夫もこの今様の前後において何らかの役割を果たしたのではないだろうか。

おわりに

ここまで明和期における顔見世狂言と曾我狂言の今様の用例を見てきた。このうち、長唄が十一・十二・十四の三例、富本が十三の一例であった。また、能を題材としたものが十の一例・狂言を題材としたものが十一の一例あり、今様の役者が全員子役という例は二・九・十四の三例あった。そして、いずれも劇中劇として時代物の場に設定されていた。

また、今様という言葉が記されていないが、次の二つの所作事は今様の所作事であった可能性が高い。一つ目は、明和五年十一月中村座の「男山弓勢競」一番目五立目の長唄「冬牡丹五色丹前」である。二つ目は、明和六年十一月中村座「常花栄鉢樹」の第一番目の長唄「楓葉恋狩衣」である。踊り手の一人、市川弁蔵の評には「大和田要之助、紅葉ノ賀の舞人の姿にて、雄次郎相手に所作」（『役者不老紋』（明和七年一月）とある。この「紅葉ノ賀の舞人」というのも今様の役人に近い役柄だと考えられる。

注（一）辻番付・役割番付・狂言絵本は『芝居番付 近世篇（一）』（早稲田大学坪内博士記

念演劇博物館：一九九二年四月）及び、『歌舞伎絵尽し年表』（桜楓社：一九八八年二月）を、役者評判記は、『歌舞伎評判記集成 第二期』八巻～十巻（役者評判記研究会編・岩波書店：一九九〇年三月～一九九二年二月）を参照した。長唄正本は吉野雪子他編「正本による近世邦楽年表（稿）」——享保から享和まで——」（国立音楽大学音楽研究所年報九・一九九二年三月）を参考に早稲田大学演劇博物館所蔵安田文庫を用いた。また正本の詞章を引用する際には「新編江戸長唄集」（高野辰之編『日本歌謡集成』巻九・東京堂：一九四二年九月）を参照した。さらに各資料からの引用には適宜漢字を当て、句読点のないものには通読の便を図り私に一字アキを設けた。判読不能だった文字は□、角書は〈〉で表記した。

(2) 高橋則子「絵本番付『鏡池佛曾我』について」（『浮世絵芸術』一〇五号・一九九二年七月）

(3) 拙稿『今様能狂言』——歌舞伎舞踊にみる今様——」（『演劇研究センター紀要』Ⅲ・二〇〇四年一月）

(4) 『源平盛衰記』巻二十「石橋合戦事」及び『源平盛衰記』巻二十二「佐殿漕会三浦事」に見られる。また、七騎で落ち延びる話は謡曲「七騎落」や古浄瑠璃「石橋山七騎落」「石ばし山」などに見られる。

(5) 注(2)に同じ

(6) 鹿倉秀典『秀鶴草子』——附「劇神僊筆記」——」（『関東短期大学紀要』三五集・一九九〇年十二月）